第６回過疎集落研究会　議事要旨

１　日　時　平成２１年４月１７日（金）１３：００～１５：００

２　場　所　中央合同庁舎２号館高層棟地下１階 国土交通省第２会議室Ａ・Ｂ

３　出席者（敬称略、５０音順）

座長：小田切 徳美

委員：広瀬 敏通、深井 正、藤山 浩、前田 和彦、牧 大介、山本 信次

４　議　事

（１）研究会報告書（案）について

（２）自由討議

（３）その他

４　議事概要　　自由討議の主な意見は以下のとおり

○管理放棄の農林地に関しては、水源涵養や生物多様性の低下の問題を取り上げてはどうか。また、「管理放棄」という表現がネガティブな感じを受ける。自然の推移に任せるという表現が適切ではないか。

○スクールバスの活用については、継続して使えるような予算措置が必要ではないか。

○「軽い林業」では、多品種少量の材質が、誰から持ち込まれても利活用できるような加工施設が必要。

○森林において、公益性と生産性の両方を過剰に求めるやり方は良くない。「生態系の多様性の回復を目指した土地の計画的利用」などの表現が必要ではないか。

○加工貿易とそれに起因する都市集中モデルが限界を見せた時代背景にある。郷帰りの時代が始まっている。歴史的ターニングポイントという意識を持つべき。特に過疎地の住民、自治体職員はもっとチャンスだと思わなければならない。

○中山間地域の衰退はエネルギー革命がターニングポイントになった。条件優位性を創出する必要がある。大都市と比べて過疎地域におけるエネルギー支出はその３倍で足を引っ張っている。エネルギー支出を減らして、さらにエネルギーを売り物にできればダブルで効いてくる。これにどれだけ投資できるか。

○中山間の家計負担が重い項目は高等教育。教育費の家計負担が重いだけではなく、過疎地域から子供を追い出すような教育をしてきた。これからは、過疎地域に迎え入れる教育をしなければならない。

過疎地域に人を送り込む政策が省庁から出てきている。教育内容について国として考えるべき。

○時間との勝負だ。あと５年でやるかやらないかにかかっている。昭和一桁世代が引退の時期を迎える。都市も５年後には追いつきかねない。５年間で過疎地域に新しい担い手を入れられるかにかかっている。

○時代背景の認識に基づき、発想の転換、政策手法の転換を行えば里帰りの時代がくる。

○多職の複合経営は、新しいスタイルになるのではなく、元のスタイルに戻るべきだという視点。今まで「多職」の人たちが集落機能を維持してきた。結(労力交換)やかんやく（公役、共同の場の勤労奉仕）に対する手当の検討が必要ではないか。

○管理放棄地の問題について、今後しっかり利用していくところから管理を放棄するところまでゾーニング（分類）と表記しているが、管理を放棄するというゾーニングは今まではなかったと思う。

○土地を適正に利用・管理する意欲と能力のある者にゆだねるための施策体系の構築が必要であり、非常に重要な提言である。

○グリーン・ツーリズム、エコツーリズムについて、産業面の期待に加え交流による活性化をとらえて加筆すべきではないか。

○地域での担い手の受け皿づくりについては、地域でどういう人が必要かについて計画を立てること、担い手になりたい人をカウンセリングする人を育成することが必要。地域と大学を仲立ちする専門機関も必要。外部の者と地域とのマッチング機能の育成が大事。

○現在をどう支えていくかの視点でまとめられている。国土政策として考えたとき過疎集落を含む中山間地域の位置づけ、国として中山間地域が必要だという認識が必要。短期的な措置だけでは、過疎集落はお荷物だと思われかねない。

○国の役割について、農山村の存在意義を国民合意できるのであれば、国土の均衡ある発展、再分配機能は国の責務。

○この５年、１０年は土木の新たな時代である。既存のものを風土にあうものに置き換えていく投資やそのマネジメントを行う者やレンジャーを養成するスクールといった人材育成の拠点を作っていくことが必要。

○地域の誇りのポテンシャルは保持されている。地域の魅力を再発見する多くの出会い（交流）を作ることが大事。

○自然自体の資本力を高める投資を、地域ごとにどう育てていくかが重要。

○人口の自然減を社会増で補うことは現実的ではないことは一般論としてはわかるが、その可能性を残したほうがよい。

○過疎集落だけでは生きていけない。地方中小都市との一体的振興がますます重要に。

○地産地消の取り組みが重要で、地域の経済的循環の視点を加えるべきである。

○移住による人材確保、支援員の定住化促進が必要。

○直販所が全国で広まっており、地域の拠点機能の一つになりうる、サービス提供の担い手になりうる。

○移住者が地域の伝統文化の継承を行っているケースがある。

○都会では価値観を満たせない人と担い手を必要とする地域とをマッチングする仕組みが必要。

○最近の若者は所有欲から存在欲へ、他人に認められたいという欲求へと、欲望のあり方が変わってきている。

○他と比較してどちらが良いという考え方こそ近代的な考え方。自分が良いと思う所が良い所という考え方になってきている。

○価値観の転換は進んでおり、若い世代の転換は終わっている。今は過疎地域で生きていく術をくださいという段階。

○人が一つの公共財となる時代だ。「私」で動く時代ではなくなっている。

○人は活躍しようとしているが、その制度整備が遅れている。制度の見直しが必要。

○様々な意識調査の中で、過疎集落住民のほうが定住意識や地域への愛着が強い。過疎集落の住民は、心の底ではポジティブな評価をしていると改めて思う。

○アクセントをつけてはどうか。時代背景の転換と過疎集落の維持・発展・振興の目的は何か。住民が困っているから対応するのか、重要な意味をもっているから振興するのか。

○循環、エネルギー、環境が重要だと位置づけるべき。

○この研究会は、他の委員会、研究会に比べて非常に充実した議論ができたのではないか。

○この研究会が、他省庁も含めた今後の委員会の持ち方の一つのモデルになるのではないかと実感しながら議論を進めてきた。